

応化会だより

昭和51年12月 第21号

特集

「故藤井修治先生を偲ぶ」

早稲田応用化学会

雑 感

(主任就任にあたって)

宇佐美 昭 次

本年(昭和51年)9月は、学部内の役職者の改選期にあたり、加藤忠蔵教授に代って応用化学科の学科主任に就任することになりました。教室の先生方はもとより、卒業生の皆様のご援助をいただき学科の発展のために微力を尽す覚悟でおりますので、宜敷くご鞭撻をお願い致します。この機会に日頃感じていることを記して寄稿の責をはたしたいと思います。

近頃、化学、とくに化学教育にたずさわっている者は、大学入学試験の受験層からみた若い世代の人々の“化学ばなれ”に頭をなやましています。とくに理論化学よりも応用化学の分野に目をそむけるようになった現実を憂えております。高度の経済成長の一翼をになった化学工業を、環境破壊の張本人としてとらえたことが大きな理由でしょう。現代の若い人々がフィーリングだけに左右される傾向がつよくなったことも一因かも知れません。

しかし、化学からはかり知れない恩恵をうけていることは誰もが知っている事実であります。そこで、化学のマイナス面を解消し、プラスの面を推進するにはどうしたらよいのでしょうか。これには、人間にとって化学とは何かという化学の哲学的意味づけを明確にすることにあるのではないのでしょうか。化学も自然科学の一部門ですから、科学という“自然の合法則を認識させる”ことにあり、化学理論は“もの(化学物質)の変化のゆくえを示す指針である”ことは事実です。かつては、科学は表面に現われた現象を追求するもので、物の本質に立入る必要はない。それは哲学の課題であるともいわれてきました。

化学技術の進歩は確かに物質的繁栄をもたらしました。しかし、価値観の大きな変化は、化学技術を不信心、不安感をもってとらえたことに、若い人々の“化学ばなれ”の主因があるのではないのでしょうか。

化学って何のために使うのか、何のために化学をやるのかという疑問を説得するために、化学の自然とのかかわり合いを認識させることもよいでしょう。人間とても生態系を構成する一員であり、万物の霊長などといばってみても、それは自然界からの人類の滅亡をはやめるだけです。教育、産業をふくめたあらゆる立場から、化学にたずさわる者が発想の転換をなすべきで、現代の化学者、化学技術者は、同時に哲学者でなくてはならない時代になったのだと思うのです。

今日、いわゆる環境問題、資源とエネルギー、さらにきたるべき食糧問題についての憂論がさかんになっています。まったく新しいグローバルな意味での化学の価値観

の確立が、これらを解決する途に通ずるのではないでしょうか。

(昭30年卒)

Trinidad 出張記

岩 崎 馨

さきに(1967年2月~1969年2月) UNited Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO)よりIraq国 Baghdad石油研究所の開設と初期運営のためProf. of Chem. Eng. として出向したが、今回は同じ United Nations (UN)内の United Nations Industrial Development Organization (UNIDO)よりTrinidad and Tobago国のCaribbean Industrial Research Institute (CARIRI)へ3ヶ月Expert として出張することになった。(1976年2月~5月)

2月の末朝東京をたち、同日夜Wien, Österreich (Vienna, Austria)着、寒く道路の隅や空地には雪がのこっている。翌日は一日中UNIDO本部で諸連絡に費やした。その翌日は朝Wienをたち深夜Trinidad島のPiarco国際空港についた。前日と異なり暖かい。

Trinidad 島は北緯10~11°, 西経61~62°の間にある島で面積は約1,864sq mile, 人口109万, West Indiesの最南端, 南米Venezuelaのすぐ沖合にある。大古においては南米大陸の一部であったという。すぐ東北にあるTobago島(116sq. mile, 人口3万7千)及び付近の山島群とでTrinidad and Tobago(以下TTと略記)という一国をつくっている。Columbusが第3回目の航海の時に島の南方より島の南部の三連峰をみとめて発見しTrinityよりTrinidadと名づけたといわれている。Columbus当時原住民はいたが今は絶えて、その後渡ってきたAfrica系, India系, その他中国, Europe系の諸民族が住んでいる。したがってChristian, Moslem, Hindu等々の人々がいる。以来Europeの国々の植民地となっていたが, 1958年1月3日Federation of the West Indiesが出来TTは始めから加入し, それは1962年5月31日解散した。1962年8月31日British Commonwealth of Nations内の独立国となり1962年9月18日UNに加盟した。

主な産物は石油と砂糖であるが, 石油は1970年にGNPの22.3%, 輸出の60%, 中央政府の歳入の28%を占めている。農業は砂糖黍が主だが他にcoffee, 柑橘類, cacao等でGNPの8%, 輸出の10%を占め, 労働力の24%をつかっている。製造業(砂糖製造業を含む)はGNPの18%である。

国内交通は国鉄が自動車の発達で約30年前に廃止され, 都市間, 都市内には公営の

busがあるがもっぱら自家用車及taxiである。petrolはpremium grade (Octane Number 95) でTT \$ 0.81/ Imp. gallon, normal grade (ON83)で0.61である。(為替相場は1US\$ = 2.12 TT\$ (1976年5月初旬), TT\$はSterling Pound につられて相場が動くようである) 大体同量の需要があり合計50,000 bb 1/d販売されている。自動車は約25万台あるというが、その半分近くがToyota, Datsanその他の日本製の車である。(島内に組立工場がある。) 免許証は日本と同じgroupの国際免許に加盟しているので、日本でもらった国際免許がそのまま使用出来る。但し3ヶ月以上滞在の時はTT免許証に書換えてもらう必要がある。(Iraq 等Araq 諸国と亜細亜等Europe 諸国は又別の国際免許のgroup をつくっている。両方加盟している国もある。)

さて出張の目的は最初にかいたようにCARIRI における石油関係の指導で、この研究所は首府Port of Spain の東方約8 mile のSt. Augustine のUniversity of West Indies (UWI) の構内にある。このUWIはFederation of West Indies の頃の創立でSt. Augustine, Trinidad;Cave Hill, Barbados; Mona, Jamaica の3分校にわかれている。Federation が解散したので大学は今14の独立国、英領地の連合国立となっている。

CARIRI は1970年TT 政府によりUNIDO の援助で創立された。(所長Mr. H. Charles) Phase I を終了し現在 Phase II の途上にある。現在員約110名。そのうちの石油研究室は CARIRI であると同時に石油鉱山省の研究室でもある2重性格となっている。1974年Phase I の終了時にはUN Secretary General Dr. Kurt WaldheimはCARIRI を訪問している。又1974年のSingle Cell Protein (SCP) のSeminar の時には日本からも出席があり、又他の機会にもSCPについて日本人が訪問している。

CARIRI の石油研究室は現在主としてTrinidad 産及び輸入原油の試験、評価、製品の規格試験を行っている。原油の試験は現在の製品向きのみならず、石油化学及び将来にわたっての高級製品にまで目を向けようとしている。設備もよく助手連も手際よく仕事をこなしている。研究室の日常業務に関しては今迄順調とはいいいながら全体及び個々の各種の問題の解決、又各人から色々な意見を求められたり又こちらからも意見を出す。器具、装置の改善、補充の問題、特に蒸溜関係の研究設備の新設、文献の追加補充、原油の評価問題(特に研究室員を指導して実験を行った。)又fellow ship の推薦もある。又石油化学に関しては国内各所で意見を求められた。

職務に関して訪問した所は

◦ Ministry of Petroleum and Mines

1975年東京でひらかれた第9回世界石油会議に2人出席している。

◦ Texaco Trinidad Inc., Point -a -Pierre (refining) 処理能力35万bb1 / d 常圧、減圧蒸溜、潤滑油, asphalt, BTX 等殆んどの仕事をしている。

- Amoco Trinidad Oil Co., Galeota Point (production)島の東南端の岬に会社があり、油田はその沖合にある。helicopter で油田の一つ Poui Field を訪問した。
- Trinidad Tesoro Petroleum Co, Ltd. Santa Flora, (production) この会社は南部の山の中で掘鑿している。
- Trinidad and Tobago Oil Co. Ltd. (TRINTOC), Point Fortin (production & refining) refinery を訪問。10万bbl /d もとShell の工場て燃料油のみを製造している。

製油所はTexaco と TRINTOC の2ヶ所のみで合計45万bbl /dであり現在原油生産は約20万bbl/d程度でその差はSaudi Arabia, Nigeria 等から輸入している。製品は国内需要をまかなって余りあり、半分位はCarib 諸国, USA 等へ輸出している。

◦ Pitch Lake

これは世界的に有名な天然asphaltの産地で島の南西部San Fernandoの西方約12 mileのLa Breaにある。広さ約148 acreの空地にasphaltがわき出ている。一部は固化したり又低い所には水がたまったり草が生えている所もあるが、又一部は現在でも吹き出していて棒を入れて引上げると糸をひく位軟らかい。採掘は湖中にtruckを乗り入れてtireの下に板をしいて停止中に沈まない様にしておいてから、固まったものを鶴嘴でほってtruckにつみこむ。Lakeのわき、海岸の近くに工場があつて軽油等とblendして針入度を調節して国内用或は船で輸出している。過去50年間に約500万ton掘って湖面が20'低くなった程度という。

◦ 講義 滞在中求められて講義を行った。

蒸溜関係	3回分	6時間	石油化学	1回	2時間
原油評価	1回	2.5時間			

CARIRI, 石油鉱山省, 石油会社等から聴講者があつた。

- Symposium National Council for Technology in Developmentが石油化学を主題としてUWIで行われた。筆者と丁度数日間来島していたWashington State Univ., USAのProf. G. T. Austinの2人で、UWIのProf P. N. Bruceが司会をした。
- Society of Petroleum Engineeringの会合が2日間にわたつてHoliday Innで行われ出席した。又展示会にはCARIRIからも出品した。
- UWIの化学科, 化学工学科, computer centre等は同じ構内にもあり必要に応じて何回も訪問した。computerはUKの寄付でICL 1902 Aである。
- 製糖工場 今回の仕事には直接関係はないがTTの主要産業でもあり工場を訪問した。甘蔗から粗糖, 精製糖をつくっている。原料の関係で雨季(7月~12月)の6ヶ月は休業する。土地がらrum酒が名産である。

(1976年8月30日記)

(旧21回卒)

特集

「故藤井修治先生を偲ぶ」

藤井修治君の死を悼む

坂 部 孜

藤井君とは、昭和18年の秋に、山本先生によって創設されたばかりの燃料化学科に入学し、スコットホールで机をならべて以来、30有余年のお付き合いをしてきました。

学部で学んだ時代は第二次大戦の終戦を間にはさんだ多難なときでした。しかし大学本部からはなれたこじんまりした学舎で、同級生のまとまりもよく、アルコールをうすめた合成酒を製造しては、酒豪の大坪先生をかこんで、愉快的ひとときを何度かすごしました。赤犬を食べようなどという物騒な話があったのもその頃でした。

昭和21年の秋に学部を卒業し、藤井君は大学に残りました。当時の社会は混乱をきわめていましたので、私も、昭和24年春まで、村井先生の研究室に残り、いっしょに草炭の研究のお手伝いをしました。その頃、野辺山の近くで草炭の開発を計画している人から村井研究室に調査の依頼があり、先生のご命令でいっしょに出かけたのが二人で旅行する始めとなりました。現地に着くと、山師(?)の人に暗い道を案内され、あやしげな料理屋で御馳走になりましたが、藤井君はそのときの異様な雰囲気の後々まで面白がって話をしていました。

昭和24年の春に、私は商工省燃料研究所(現在の工業技術院公害資源研究所)に入所して石炭の研究に10数年の間従事することになりました。このため仕事の上での交流もあって、藤井君との親交の度はさらに加わりました。3年に一度関西でひらかれた日本化学会年会にいっしょに出かけることが多く、ついでに京都近郊から奈良の付近にまで二人で観光に出かけました。この二人の旅を藤井君は弥次喜多道中と称して楽しんでいるようでした。

また、お互いに大学と研究所に往き来して議論を重ねました。私が大学を訪れたときは、帰りがけに加藤先生、猿井さんたちとジャン卓を囲み、メンバーがそろわないときは必ず高田馬場駅付近のスタンド・バーで夜おそくまで語り合い、藤井君からは「君が大学にくるといって、家内が帰りがおそくなるのねというようになったよ」といわれておりました。藤井君はあまり酒を飲まない方でしたが、このような付き合いによるこんで応じてくれ、バーのママさんにはもてるようでした。彼女たちは酔っぱらいの話より、

素面の人の真面目な話を好むのでしょうか。3年に一度きり訪れない京都でなじみのバーを開拓したのも藤井君でした。この頃、私が提出した学位論文について某先生と意見が合わず、しばらくペンディングとなりましたが、私が自説をおろさないで、藤井君が村井先生を通じての斡旋に親身の努力をしてくれた友情は今でも忘れることができません。

昭和40年代に入ると、藤井君は有機合成化学の研究に力を入れるようになり、私は排煙脱硫、重質油水素化分解など公害防止関連の技術開発を担当することになって、学問上での交流はとだえがちとなりましたが、一昨年突然藤井君から「秋に札幌でひらかれる石炭科学会議に出席しないか、その帰途に日本石油精製の室蘭製油所長に栄転した同級の松岡君に敬意を表しに行こう」という申し出があり、私はさっそく賛成して出かけ、松岡君のご好意で層雲峡にまで足をのびしましたが、これが弥次喜多道中の最後となりました。今年の春卒業30年を記念して伊豆でひらいた同窓会に藤井君は出席せず、直後に「同級生のことがなつかしく思い出されるので、どんな様子だったか教えてくれないか」という電話がありました。私は大坪君、西島君たちとプレーした宿酔ゴルフの話などをして、近いうちに大学を訪れると約束をしましたが、これを果す前に突然の訃報に接し、ただただ驚くばかりでした。

藤井君のような優れた友人を持つことができ、早稲田に学んだ甲斐があったと常々考えておりましたのに、今はただご冥福を祈るばかりです。ただ近く遺稿が「石炭 化学と工業と業」として出版されるとき、いくぶんかの慰めを感じております。工業技術院ではポスト石油のエネルギー源としてサンシャイン計画のなかで石炭ガス化、液化の技術開発を進めていますが、生前の藤井君が推敲を重ねた著述が、これからのエネルギー技術開発に必ず大きな貢献をすると信じているからです。

(工業技術院資源研究所，燃，昭和21年卒)

藤井先生の思い出

幸田 弘

51年6月9日突然の訃報に接しあまりの驚愕に声も出なかった。しばしば昼食を共にしていた私は数日前に言われた事が急に思い出された。「どうも具合が悪い、もう長いことない。葬式は頼むよ」と。にこにこしながら話された笑顔が今もはっきり脳裏に焼付いている。虫が知らせたと言うのか、それが現実になろうとは夢にも思わなかった。

前々から悪いとは聞いていたが会えば陽気に雑談と言うより馬鹿話しといった方が適切な話をしていた。私はその時も冗談と聞き流しその上悪態までついてしまった。胸中も察せられなかった私は誠に悔やまれてならない。

私が先生と初めてお会いしたのは昭和19年頃であったと思う。襟に錨のマークをつけ凜凜しい姿で当時の石油工学科村井研究室に来られた時である。素晴らしい学生と最上級の賛辞を使われた森田先生の言葉を聞いていたので特に関心を持っていた。この言葉を裏書きするように1人黙々と実験をされていた姿は今も思い出される。特にガス分析の爆発後のピペットに手を当ててしばらく考えておられるように見えた姿はなぜか妙に印象に残っている。終戦を迎え錨のマークは不要になり先生は大学に残られた。その後数年は食糧、住宅事情も最悪の状態であったが幸い燃料科（終戦後改称）敷地内にあった建物を希望者の手で手入れし何人がが住むようになった。後日先生も入居し私はその真上の室に住んでいた。先生と同級の人も3～4人居られ夜はよく中国語の講習会を開いたものであった。その頃の先生は全く見向きもされなかった。バイオリンをよく弾かれており私は真上なのでよく聞えて来たがその音色は鋸の目立程度或は私に才能がないのでそう聞えたのか、いづれにせよあまり上達されなかったように記憶している。結婚された時も寮生活の頃で家を新築されておられたがわづかに間に合わず新婚早々別居されていたように思う。その後いつの間にか麻雀を覚えられたが奥様と婚約中に手ほどきを受けたように聞いている。先生はその頃車にも大分興味を持っておられ当時燃料科にあった和製ジープと称する車で一緒に外出した折は途中運転を交替した事も何度かあった。学生時代に一度受験されたが縁石に乗り上げ失敗したそうである。先生が落ちたというのは生涯でこれだけではなかったろうか。数年後奥様が練習を始められ私も多少お手伝をしたもので丁度よい機会なので一緒にと勧めたがどういうわけか受験されなかった。奥様が免許を取られた当座難所は先生が運転をされていたようであった。その後は時々奥様が送り迎えされていたのは衆知のことである。

先生とは約30年の長い間公私共衝突も何度かあったが親密にご交際を頂いた。公の方は学生実験、私の方は主として麻雀で一緒にしたものである。ゴルフもやられていたがあまり熱中されなかったようであった。麻雀が潔癖な先生の唯一の娯楽ではなかったかと思われる。普段を知る人には想像もつかない程楽しまれ、また周囲も楽しませてくれた。動物園に居るような錯覚を起させることも度々であった。最近はお身の具合が悪いと云われ手合せすることもなく、よく口ぐせのように麻雀、ゴルフをやる気分になりたいと言われておられた。私もそれを期待していたのだが遂に実現出来なくなった。あの奇声も聞く事は出来ない。誠に淋しい限りである。先生が逝かれて早や半年が過ぎたが未だに昼食の折にはそこに居られるように思える昨今である。

先生の大学に於けるご活躍は今さら私が記すまでもないが、これからというときだけに応化にとっても、大学にとっても大きな損失であり、またご家族のご心中察するにあ

まりあるものがあります。長いご交際を通じての思い出はとてこの紙面に書き表わせるものではなく私的な面での一部を記すに止めたいと思います。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(理工学部技師)

真の研究者、教育者として歩まれた藤井先生

坪井彦忠

藤井先生は、科学の分野全般にわたる深い御見識と、非常に鋭い解析力を持たれておられ、それに加え、人一倍の努力家で、優れた研究を行うべく日夜大変な御研鑽を積まれておられました。そのため、レベルの高い研究を続けて行くのは、いかに多大なエネルギーを必要とするかという事実を認識されておられ、私ども学生に対し、研究に対する厳しい態度を身につけさせることを最も大切な点として指導されてこられました。これは、先生御自身が研究に向われている立場であり、また化学技術に携わる者が根本的に身につけていなければならない態度であることを堅く確信しておられました。これは、教育者としての先生が使命にも似たお気持で、絶対に妥協されずに貫き通されたものであります。

このように研究には、厳しいお考えを持たれておられ、流行として脚光を浴びている分野に浮草のように出現する多くの研究の空しさを痛感されておられました。そして確固たる基礎の上に徐々に積み上げて行く研究こそが真の研究価値を持つことを早くから見抜いておられました。石炭の研究に先生が非常な興味をもたれ、ライフワークとして手がけられる決意をされたのもこのようなお考えによるものと思われれます。最初は、石炭の化学的利用の面の御研究を国内および米国で行なわれ、その結果石炭を最も有効に利用するためには、その化学構造の解明が最も重要であることを、いち早く認識されたのでした。先生の石炭に関する御研究は、このような立場から、構造解明に関する基礎的研究を積み重ねて得られた輝かしい業績です。しかも、このような御仕事を積み重ねられたのが、折りしも石油化学の華やかな発展期でありましたため、私どもの想像以上にこの御研究を続けるのは大変なことであったと思われれます。石油以後の燃料、化学原料としての石炭の重要性を、早くから認識されておられた先生の御努力の一部が燃料協会賞として結実したのですが、石炭の研究が活発になりつつあるだけに、先生が蓄積された成果が、これから本格的に花を開くことと思われれます。もし、先生が今、お元気でいらっしゃるとしたら、石炭の化学が脚光を浴びつつある現在においても、先生は在来の御

研究から著しく飛躍したもの等は手をつけられず、基礎から体系づけられた研究が続けられる立場を選択されると思います。

先生は、石炭以外の分野の有機合成反応にも、非常に興味を持たれ、この方面でも大きな成果をあげておられます。最近はこの分野に非常に多くの報告が出るに至り、先生の御研究のもう一本の柱に成長した感があります。このように今迄の先生の御努力が結実しつつある時に、先生を失ったことは残念と言う言葉ではとうてい表現できません。先生のあげられた御成果は、これから時の経過するにつれ一層価値が定着し、次代の研究者に貴重な結果として受け継がれて行くことは間違いありません。先生の御冥福をお祈り申し上げます。

(昭45年博士課程卒・三井東圧化学(株))

藤井修治先生の御逝去を悼む

川 上 敏

6月9日、先生の訃報が届いた時、私はたまたま会議室で翌日の仕事の打合せ中でした。同窓の萬君がドアを開けるなり、『藤井先生亡くなった』と言った時、私は咄嗟に声が出ず、『どうして!』と見当違いな言葉が次の瞬間とび出してしまいました。それくらい意外でした。私の周辺には先生の門下生が多く、先生の近況はそれ迄よく耳に入っていました。先生には偏頭痛の持病があり、最近また少しお悪い様子なので、『じゃあ、一度激励に上るか』などと話をしていた矢先でもあり、まだまだこの様なことになろうとは夢想だにしていなかっただけに、悲報を聞いた時の衝撃はかえって大きなものでした。御家族の悲嘆はさぞかしと衷心からお悔み申し上げます。

20年前、私達が学生であった頃は先生もまだお若く、村井研究室の講師として、草炭から抽出したフミン酸の構造研究に没頭して居られました。9号館に増設された新しい実験室で、いつもまっ白の実験衣を着て、当時の新手法であったペーパークロマトグラフィ等を駆使して精力的に研究を進めて居られたお姿が目につきます。

その当時から学生に対する先生の御指導ぶりは非常に几帳面であり、また厳しいものでした。先生のお顔はどちらかと言うと童顔で柔かな印象を与えましたが、間違ったことに対しては容赦をなさらぬ御性格でもありました。学生達のいい加減な態度に接するときにこやかな顔から短刀直入に厳しい言葉が返ってくるのが常であり、戦後放縦に育った学生には若干煙たい存在で『しぶい先生』などと蔭口をたたいた時代もありました。しかしこれも先生の教育に対する責任感の表われで、卒業生に対しては責任から解放さ

れたためか、非常に寛大で大事に扱って下さり、面倒をよく見て下さいました。卒業後、夜先生の研究室をお借りして、何人か集まって電子論等の輪講会をもったことがありますが、先生は時間の許す限りおそく迄私達にお付き合い下さり、何やかやと世話をやいて下さるのが常でした。

先生は几帳面な一方気取らない気軽な方でもあります。何かで御自宅を訪問した際、お暇をしようとする、『送ってやるよ』と御自分は下駄ばき姿で奥様の運転ではるばる下井草の拙宅まで送って下さり恐縮したこともあります。

遊びの方はあまりなさらなかったのか、この方面の御指導？は残念ながら受けた記憶がありません。一度ゴルフのお伴をしたぐらいで、これも決してお上手な方ではなく、ミスショットをすると、『アッ、アー』ととび上り手をふるわせてくやしがるなど飾らないプレーぶりでした。お元気になったらもう一度と思っていたところ、それも適はずとなっていました。

先生は民間会社に居られてもまだ定年に満たないお若かさであり、先生御自身もこれから研究面でも教育面でもいろいろ抱負を抱いて居られたでありますように、さぞかしお心残りであったろうと悔まれます。先生の御冥福を心より御祈り致します。

(昭31年卒日本石油化学(株))

故藤井修冶先生の思い出

高 宮 信 夫

昭和51年6月9日早朝、藤井先生は突然死去された。その前日大学の構内でお会いしたときには全く予期できないことであった。もっとも数年あるいはもう10年以上もたっているかもしれないが、いつの頃から思い出せないほど以前から身体の不調を種々の形で表明されてはいた。曰く頭痛がする。あるいは腹痛がする。身体の精密検査を何度もうけた。あるいは手術をしたとか、いろいろなことがあり健康状態に異常があったことは確かであった。しかし外見は顔色も悪くはなく病人とは思えないように見えた。ただ最近食欲がなく昼はトーストを食べるのがやっとだというように伺っていたし、気のせいか歩行も緩慢で往年の元気はなかった。しかし余りにも突然の死であり私は同日朝大学へ来て藤井先生の死を知らされたとき、思わずそれはほんとうかと聞き返したほどびっくりした。

思えば私と先生とおつき合は長い。昭和22年私が卒業論文のために村井研究室へ入った時、そこに藤井先生は居られた。卒業して間もなく、当然若くて張切って研究に従事しておられた。そして研究や教育に対して非常に厳しい態度で望む一面のある人であることを知った。それ以来藤井先生は教務補助、講師、助教授、教授と順調に昇格し、研究業績も着実に積み重ねられ工学博士となり、昭和49年には燃料協会賞も受賞され、石炭に関する研究者としては日本で最高水準にあると伺っている。

約30年近いおつき合のことであるから種々思い出はつきないが特に印象に残っていることは、気楽な会合や研究室旅行のときなど愉快的な人柄の一面をのぞかせることがあり、ときには非常にあけっぴろげな話をしてうちとけることのできる人でもあった。最近ではお互いに多忙な立場にあり急ぎの用があるとか、共同ゼミがあるとか以外は余り雑談したりお合ししたりする機会が少なくなっていた。亡くなる一週間位前に研究費のことで打合せに伺ったとき、たまたま時間があつたので先生にはいろいろと近況を話されまた私の意見を聞いたりして大分長く話し込んだことがあった。このとき別れ際にずいぶん久しぶりにゆっくり話が出来たねと感慨深げに言われたのを思い出さずにはいられない。

最後に先生の研究業績の概要を紹介しておきたい。

- (1) 初期の研究は草炭およびフミン酸に関するもの
- (2) 33年頃以降しばらくは赤外吸収スペクトルによる石炭の化学構造の研究として一連の研究がある。
- (3) 「石炭の炭化初期段階に関する研究」というテーマで石炭技研と資源研と早大とのグループ研究としての一連の研究。
- (4) 昭和45年以後とおもわれるが有機合成化学および触媒化学に関する一連の研究。以上の研究成果は主として燃協誌、工化誌、日化、Fuel、早大理工研報告などに掲載され、私の調べたところでは総計数55報となっている。他に著書石炭に関するもの、一般化学に関するもの各1冊がある。謹んで御冥福を祈る次第である。

(化学科教授 燃料 昭23年卒)

故藤井修治先生の出版記念会開催さる

11月14日(日)午後1時より大隈会館完之荘において故藤井修治先生の著書「石炭—化学と工業」の出版記念の会が開かれました。同書は先生の長年の石炭化学の御研究の成果をまとめられたもので、工業技術院の木村英雄博士との共著です。おりからの激しい雨

にもかかわらず、先生の御遺族、高宮、佐藤両先生御出席のもとに、先生ゆかりの同窓生約30人が参加して開かれました。

記念の会は、坂部 孜さんの御挨拶に始まり、つづいて両先生より藤井先生の御業績、思い出などの御話しがあり、川上 敏さんの御発声で黙祷をささげ、しめやかな中にも和やかに3時半会を閉じました。おりからの雨も散会時にはあがっていました。

出席者 藤井先生御遺族

高宮先生、佐藤先生

坂部 孜、小島淳一、川上 敏

津富正孝、尾沢正也、小山達夫、

矢崎文彦、小林尚吾、山口達明、

萬 肇、坪井彦忠、新畑俊治、

岡田一利、谷田部省三、武石 睦、

渡久地政和、森 吾一、大籠祐二、

坂爪寿恵広、斎藤仁俊、鷺見富士雄、

山口辰夫、北村 智、島田友行、

(萬 肇 記)



◎ 叙勲

藍綬褒章 進藤喜信氏（電気化学工業(株)、昭和12年卒）

◎ 訃報

次の方々が亡くなりました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

太刀川 正一郎氏 （ディスプレイジャパン(株) 昭和13年卒）

戸 坂 隆氏 （ゼネラル石油精製(株) 昭和25年、燃料科卒）

石 川 三 郎氏 （東京化学精練所(株) 大正12年卒）

◎ 会務報告

○ 運営委員会 51. 9. 24 大隈会館

新運営委員を交じて次のことが決った。

1. 52年度総会を大阪で開催（4月1日、2日）。
2. 60周年記念行事を52年10～11月頃開催

尚新運営委員は以下の方々です。

内海碩夫、桑原幸二郎、伊藤孝、高橋章、小野裕二郎、小久保良、

小林礼次郎、小林宏、山本明夫、速水清之進、萬 肇、（以上敬称略）

○ 特別講義

- 小林礼次郎氏 （(株)小林コーサー取締役）

「化学工業の中の化粧品」 51. 9. 29. 56-101 教室

- 古関敬三氏 （大日本印刷常務取締役）

「フォトファブリケーションとエレクトロニクス」 51. 10. 27.
56-101 教室

- 小久保良氏 （日産化学工業(株) 中央研究所次長）

「高圧化学プロセスの開発」 51. 11. 24. 56-101 教室

◎ 会合

○ 山本研一先生喜寿の会

山本先生が停年退職され早や七年の年月が流れ、先生には今年二月に満77才の誕生日を迎えられました。そこでお世話になった研究室の新制第1回生（昭26年3月卒）より最後の第18回生（昭43年3月卒）で、先生の喜寿の会を計画、5月7日に先生を大隈会館に迎えし祝賀会を開きました。また当日は4月に石油学会賞を受賞されました森田義郎先生のお祝の会も急遽開くことになり、会館の会場は二重の喜びにつつまれ、百目鬼先輩の司会で出席者一同楽しい一刻を過し、先生の一層の御長命と御健康をお祈りしながら8時過ぎに会を終りました。尚、後日両先生に記念のポヘミヤン・カットグラスを贈呈いたしました。

（寄附者芳名） 岩垂尚喜、百目鬼清、山田早太、井上隆、松田誠一郎、山口博、保坂弘毅、金子勝三、名手孝之、市川嘉紀、西川暎一郎、田中守。

（出席者） 熊田利司、桜井貞幸、百目鬼清、田中守、鈴木久爾雄、水野高光、山本明夫、嶋根政彦、佐野毅、山田茂、上坂良次、名手孝之、和田瑞穂、安倍健治、大塚淳、高木章介、茅原伸光、丸本正人、永瀬孝男、橋本一郎、渡辺治道、菊地英一、西川暎一郎、土本皓二、平山秀二、古谷敦、斎藤昌弘、金子四郎、高安正躬、進経勝、村岡猛、二見英雄、森吾一、鶴見道夫、坂田信彦、曾布川倍邦、吉富末彦。

○ クラス会 昭37年卒（51. 1. 4）

卒業以来毎年かかしたことの無い恒例のクラス会を1月4日東京アメリカン・クラブで行った。常連の池内、平川や相変わらずの児島、高桑に加え、めずらしく井上（征）、堀川、王、などの顔も見え大いに飲み、かつ語り、日頃の若さぶりを発揮した2時間であった。出席者は以下の通り。

井上征四郎、池田晴彦、池田隆哉、小倉茂稔、児島啓三郎、後藤典弘、佐々木健二、関口正光、竹田研爾、高桑晶平、高松秀昭、綱島真、中嶋宏之、平川揚二、堀川義晃、米田和生、小倉義弘、正義雄

（敬称略） （岸本記）

教室だより

○9月に学科主任改選があり、今回は大分年代が下がって宇佐美昭次教授（昭30年卒、新制5回）が当選、就任されました。

因に新学部長は村上博智教授（土木工学科）大学院委員長は齊藤孟教授（機械工学科）、理工研究所長は伊藤糾次教授（電子通信学科、留任）となりました。

○平田彰教授は本年度在外研究員（短期）として6月9日から主としてブリティッシュコロンビア大学（カナダ）で研究され、その他カナダ、ヨーロッパを廻られて12月17日御元気で帰国されました。

○皆様すでに御承知と思いますが村井総長が6月8日脳内出血のため倒れられ、直ちに東京女子医大病院へ入院されました。幸いその後経過がよく8月20日退院され、ひきつづき通院で機能回復につとめられました。現在（12月20日）右手、右足に軽度の麻痺があるそうですが日常生活には全く支障なく、大学の公式の行事にはすべて御出席になっておられます。早大100周年記念事業など総長として極めて重要なお仕事が多いと思いますが、無事重責を果たされますことを願っております。尚総長の任期は昭和53年11月までとのこと。

（佐藤 匡）

編集後記

- 藤井修治先生が6月9日心筋梗塞で亡くなられてからもう半年が過ぎました。何か信じられないような気がして、いつもと同じように研究室にいらしているような錯覚をすることがあります。
- 52年度の総会は4月1日、2日大阪で開かれます。日本化学会の年会と重なりますが、例年よりも多くの会員の出席が期待されます。
- 本年度の「だより」は1回の予定でしたが、何とか2回発行できました。今後、会員の皆様の御協力により年2回を続けていく積りでおりますのでよろしく御願い致します。

(岸本記)

昭和51年12月 発行

発行	早稲田応用化学会 新宿区西大久保4 早大理工学部内
編集兼 発行人	佐藤 匡 岸本 孝夫
印刷	蠶堀越研究所 千代田区神田神保町2-20